

## 1. ふるさと・福井～修学時代

### ◆少年時代を過ごした福井

- 1910（明治43）年4月9日、福井市佐佳枝中町に生まれる。  
名前は、母親の希望により「静」とつけられる。
- 少年時代は、近所の佐佳枝廻社の広場を遊び場とし、通学していた順化尋常小学校（現在の順化小学校）から帰るとすぐに、洋服屋を営む両親の手伝いをしていた。
- 家では、ほとんど本を買うことはなく、兄が友人から借りた本や雑誌を読んでいた。家に電気がなく、暗いランプの下で読んでいたが、目を悪くすると、母親から注意されたりした。

### ◆自分の進む道を方向づけた学生時代

- 小学校卒業後は大阪に出て、後に民政党の代議士となる広瀬徳蔵の事務所に住み込みで入所。
- 広瀬先生の蔵書『国訳漢文大成』や漢詩集等に親しむうち、「万葉集」と「詩経」を比べた研究をしたいと思うようになる。
- やがて、東アジアの古代文学、思想に心をひかれ、中学校教師となって一生読書をしながら暮らそうと決心する。立命館大学専門部（夜間）に入学し、生涯の師である小泉荃三先生に出会ったのはこの頃。

## 2. 教育者として

### ◆働きながら教員免許を取得 中学教諭に

- 立命館大学専門部（夜間）文学科に入学した翌年の1934（昭和9）年、小泉荃三先生の指導の下、文部省中等教育国語科免許を取得。
- 1935（昭和10）年、在学のまま立命館中学教諭となり、翌年つる夫人と結婚。
- この頃、通学途中にある古書店に立ち寄り、漢文で書かれた書物などをよく読む。呉大澂の『字説』を読んだ際、それまでに知っていた許慎の『説文解字』の学説が必ずしも完全なものではないと思うようになる。

### ◆立命館大学助教授へ

- 白川先生は中学教諭在職のまま法文学部漢文学科に入学し、1943（昭和18）年に卒業と同時に立命館大学予科教授となる。翌年に専門部教授となり、またその翌年、35歳で文学部助教授となる。
- 中学教諭時代から助教授になるまでの間、世の中は戦時中。終戦後は学内の民主化が進み、文学部では、最も信頼されていた小泉先生が、戦争の悲惨さに想いを寄せて歌集を刊行していたことなどから不適格教員とされ、大学を去る。
- その後、小泉先生が創設した出版社「白楊社」から、白川先生は、漢文の師 橋本循先生〔越前市（旧武生市）出身〕とともに、戦後の新カリキュラム用の漢文教科書『新修高等漢文』を編集、刊行する。

### 3. 研究者として

#### ◆ 学術誌に研究成果を発表

- 立命館大学文学部助教授となった後、1948（昭和23）年に第一の論文「卜辞の本質」を発表。亀の甲や獣の骨を焼いたひび割れで占った内容や吉凶を、それに刻んで記した卜辞は、王の神聖化をあらわしていると論じる。さらに「訓詁に於ける思惟の形式に就いて」、「殷の社会」の二作の論文を続けて発表し、これらは初期の論文三部作といわれている。
- その後、月刊誌『説林』の創刊や、寄付金を集め古代学協会を設立し機関誌『古代学』を発行するなど、学術誌の発行に努める。同時に、台湾や中国の研究者と交流し論文を多数発表。甲骨文字研究により国内、国外から評価され、1954（昭和29）年に44歳で文学部教授となる。

#### ◆ ガリ版の時代－初期の三部作

- 甲骨文字（亀の甲・獣の骨に刻みつけた文字）、金文（青銅器に鑄込んだ銘文）を研究。活字にない字が多く、手書き原稿を印刷し製本するガリ版で発表する。
- 中国の殷周時代の文字学研究に関する約2万片の卜辞をトレースした資料を整理し、1955（昭和30）年から、『甲骨金文学論叢』を刊行、文字学の中心的な書物とされてきた許慎の『説文解字』を批判するなど、新たな文字学の体系を示す。
- この頃、大阪大学、名古屋大学の講師を兼任する他、月に一度、書家・篆刻の同好者等10人でつくった「樸社」においても講義を行っており、100～200ページの講義案をプリントして渡し、説明するという独自の講義形式をとる。
- 樸社における講義内容は『金文通釈』『説文新義』としてまとめられ、『甲骨金文学論叢』とともに、初期の三部作として、白川先生の全精力を傾けた著述となる。
- また、立命館大学大学院の設置に伴い、講義案としてガリ版の『稿本詩経研究』（通論編・解釈編）と別冊『興の研究』を刊行、『興の研究』は、京都大学に博士論文として提出、52歳のときに文学博士の学位を受ける。

### 4. 研究の成果を社会へ

#### ◆ 60歳で初の一般書

- 1970（昭和45）年、60歳のとき、学問の成果を一般に広く伝えたいとの思いから、白川先生初の一般書『漢字』（岩波新書）を刊行、ベストセラーとなる。
- 66歳で大学を定年退職。立命館大学特別任用教授となった年には、甲骨・金文資料の詳しい解説とともに、文字成立の時代について述べた『漢字の世界』（東洋文庫）を、2年後には『漢字百話』（中央公論社）を刊行するなど、様々な一般書を刊行する。出版社から執筆依頼があった『孔子伝』（中公叢書）については、学園紛争の喧騒の中、1972（昭和47）年に書き上げる。
- 1981（昭和56）年、71歳で名誉教授となった年に、台北の中央研究院国際漢学会議に出席。「古代文字学之方法」と題して『説文解字』の批判と甲骨・金文資料による新しい文字学の方法を提示する。若い研究者の間には理解を示す人が多く、東アジアでも白川先生の学説が浸透する。

◆字書三部作により白川文字学が結実

- 大学を退いた73歳の時、専攻の卒業生で組織する中国芸文研究会を結成、機関誌『学林』を発行する。同時に、後の字書三部作、『字統』、『字訓』、『字通』に着手し、74歳で『字統』、77歳で『字訓』を刊行、系統立った文字（漢字）教育の必要性を説いたとして、毎日出版文化賞特別賞、菊池寛賞を受賞。
- 86歳で刊行した『字通』は、半世紀にわたる中国古代文字研究の集大成として『字統』以上の反響を呼ぶ。この三部作の完成により朝日賞を受賞、翌年1998（平成10）年には、文化功労者として顕彰される。
- さらに1999（平成11）年に89歳で勲二等瑞宝章を受章、91歳で井上靖文化賞、92歳で福井県県民賞を受賞、94歳で文化勲章を受章するなど、長寿に恵まれながら多くの賞を受け、白川先生の研究の趣意は、多くの人々の理解を得ることができた。（字書三部作はいずれも平凡社）

5. 遊び—学問も楽しみながら

◆芸に遊ぶ

- 1999（平成11）年、89歳の時に、これまでの主要な出版物を再編集し、著作集を刊行しようとして計画する。5年間仕事を継続していくためには、他に適度の緊張を保てる定期的な企画を持つのがよいと考え、一般の人々に楽しんで文字学に親しんでもらうことを目的に、最も不得意としていた講演活動を年4回程度の「文字講話」として開始することにした。
- 講演には毎回200～300人が参加、1時間半の講演、30分の質疑応答は盛況だった。論語に「芸に遊ぶ」という語があり、それを人生の最高の境地とした孔子のように、白川先生も、学芸の基本である文字の世界に人生の最高の境地を求めて、その中で遊び続けた。
- 京都市桂に暮らし、研究生活を続けた20余年の間の対談、講演録、論考等は、『回思九十年』、『文字講話』、『桂東雑記』（いずれも平凡社）などに収録されている。白川先生は、半世紀以上にわたり、「万葉集」、「詩経」の研究から始まって、甲骨文字、金文などの中国の古代文字の研究一筋に生き、漢字に関しては世界に誇れる独創的な「白川文字学」としての業績を残した。これらの著書からは、古代の人々の思想や生活に踏み込み、漢字の世界に遊び続けた文字学の大家、白川先生の学問が身近に感じられ、私たちもその中で楽しく遊ぶことができる。
- 白川先生は、中国古代文字研究が、我が国の文化や国語の将来を考える上で今後も非常に重要な分野であり、東洋の問題として、漢字を活性化することが必要であると述べている。白川先生は、2006（平成18）年10月30日、96歳で亡くなったが、私たち一人ひとりが、漢字の成り立ちや構造等についての理解をより深めていくことで、今後も文字学の新しい世界が開けていくだろう。